

3. 区部・多摩地区の植生概要

(1) 区部・多摩地区植生概説

東京都（本土）は東西に長く、西高東低の地形を示している。自然植生の領域もこれに対応して東から西に推移する。すなわち、東端の東京低地から武蔵野台地、多摩丘陵をはじめとする丘陵地を経て奥多摩の関東山地下半部の海拔約700 mまでがヤブツバキクラス域で、その上部の海拔約1800 mまでがブナクラス域、さらに海拔1800 mから東京都の最高地点である雲取山頂（2018 m）までがトウヒークケモモクラス域である。しかし、現在奥多摩の日原川源流部一帯と三頭山、高尾山などごく一部の地域を除いてまとまった自然植生の生育地は見い出せない。すでに沖積低地と台地の大部分と丘陵地のかなりの部分が市街化されており、残存する代償植生も断片的なものが多くなっている。一方山地もそのほぼ全域が森林で覆われているが、その大半が二次林と植林である。

東京都の現存植生の配分は前述の地形とよく対応している。以下にその概要を区部と多摩地区に分けて記す。

1) 区部

区部は高度の都市化を反映して無植生地（市街地、工場地帯など）が大部分を占め、単調な植生配分を示している。しかし、一部の苑地や公園にはスダジイ・ヤブコウジ群集やタブ・イノデ群集など区部にしか見られない自然林が分布している。コナラを主とする二次林もかなり少なくなってしまうが、市街地の間に小さな島状に残存している。区部に見られる二次林は西端部の一部の物を除いてコナラ・オニシバリ群集に含められるものばかりである。区部東部の東京湾岸の新しい埋立地には、ヨシ、チガヤ、オオクサキビなどを主体とした雑草群落が分布している。

2) 多摩地区

(1) 沖積低地

多摩地方の沖積低地の大部分は、多摩川とその支流である浅川、秋川などによって形成されたもので、かつてそこには水田が広い面積を占めていたが、今日ではその大半を市街地が占めている。現在、比較的まともに水田が残されているのは、府中市から国立市にかけての多摩川沿いと秋留合をはさむ秋川と平井川の川沿い、霞川沿いなどに限られている。稲城市付近の多摩川沿いには、水田とともに落葉果樹園（ナシ）がまとまった広がりを見せている。

多摩地方の沖積低地で自然植生が分布しているのは、多摩川とその支流の河辺である。多摩川中流部と南北浅川の合流点付近より下流にはオギ群集を主とする冠水河辺植生が発達しており、多摩川上流部と北浅川、秋川の河辺にはツルヨシ群集を主とした冠水河辺植生が見られる。

(2) 洪積台地

多摩地方の台地（武蔵野台地）は早くから市街化が始まった地域で、現在も東部から西端部に向かって都市化がなお進行中である。植生の配分から見ると、この台地上は東半部と西半部に分けられる。

東半部はすでに大部分が市街化されている。しかし、古い街道沿いにはケヤキ・シラカシ屋敷林や緑の多い住宅地が線状あるいは帯状に見られ、この地域の特徴的な景観を示している。台地上の典型的な二次林であるコナラ・クヌギ群集は大きく減少したが、市街地の中に点状、島状にやや高密度で残存している。残存する自然植生はきわめて少なく、段丘崖にシラカシ群集が断片的に見られるのみである。

一方、西半部は現在市街化が急速に進行中であるが、まだコナラ・クヌギ群集や畑、茶畑、果樹園などがまとまって残されている所もあり、これらは古くからの集落と一体となって、今日もなお武蔵野の典型的な景観を形成している。

(3) 丘陵地

多摩丘陵をはじめ、加住丘陵、草花丘陵、加治丘陵、狭山丘陵などの丘陵地は、かつてはその大半が二次林（コナラ・クヌギ群集、コナラ・クリ群集、アカマツ・ヤマツツジ群集）で覆われていた。今日もこれらの丘陵地の植生の中核を成しているのはこれらの二次林であるが、近年の多摩ニュータウンに代表される大規模な宅地造成やゴルフ場の造成によってそれらは大きく蚕食されてしまっている。こうした中で比較的良い状態で植生が残されているのが狭山丘陵である。丘陵地に見られる自然植生は尾根筋や急斜面、丘陵脚部に断片的に残存するシラカシ群集のみである。

(4) 山地

多摩地方の西半で広い面積を占める山地は、その大部分が森林植生で覆われている。しかし地域によってその配分は異なっている。

山地東部ではスギ・ヒノキ植林が圧倒的に大きな面積を占めている。これに次いでコナラ・クリ群集も比較的多く見られるが、その分布は尾根筋や急斜面などの造林不適地に限られている。この地域に見られる自然植生としては、高尾山や八王子城跡などにまとまって分布するモミ・シキミ群集、多摩川、秋川の河岸段丘崖や山地の尾根筋などに残存するシラカシ群集があげられる。

山地中部、西南部でも植林地が優勢であるが、二次林の割合も大きい。植生の主体を成すものはスギ・ヒノキ植林であるが、高海拔地の尾根筋などにはカラマツ植林もよく見出される。一方、二次林の主体をなすものはミズナラ・クリ群集であるが、低海拔地にはコナラ・クリ群集もよく見られる。自然植生としては、三頭山のブナ・オオモミジガサ群集、シオジ・ミヤマクマワラビ群集や御岳山、大岳山、鋸山などのツガ・コカンズゲ群集、多摩川河岸のケヤキ・イロハモミジ群集などがある。

山地西北部、すなわち日原川上流部から雲取山に至る一帯は、島しょを除く東京都で

最も自然林の優占する地帯である。この地域の大半はブナクラスの自然林で占められており、山腹斜面ではブナーヤマボウシ群集、尾根筋や急斜面などでツガーコカンスゲ群集、沢筋ではシオジーミヤマクマワラビ群集がそれぞれ優勢である。また、ブナーヤマボウシ群集の上方の海拔1700～1800 mの斜面と1500 m以上の尾根筋にはコメツガーウラジロモミ群落が分布しており、さらに雲取山（2018 m）を中心とする海拔1800 m以上の山地にはトウヒコケモモクラスのシラビソオオシラビソ群集が優勢である。

(2) 凡 例 解 説

Ⅱ 亜寒帯・亜高山帯自然植生

1. シラビソ-オオシラビソ群集

奥多摩地域の雲取山や芋の木ドッケを中心とする海拔約 1800 m 以上の一帯に分布する群集で、シラビソ、トウヒ、コミヤマカタバミ、バイカオウレンなどを標徴種、識別種とする。東京都に分布するものは、ネコシデ、オガラバナ、シノブカグマ、オオカメノキなどを持つコメツガ亜群集だけである。

群落高は通常 20 m 前後で、林冠はコメツガが優占し、これにトウヒ、シラビソ、ダケカンバなどが混生する。亜高木層にはオガラバナ、ミネザクラ、ナナカマドなどがみられるが、一般に植被率は低い。低木層にはコヨウラクツツジ、サラサドウダン、ミネカエデ、オオカメノキ、コメツガなどが出現している。草本層にはシノブカグマ、マイヅルソウ、コミヤマカタバミ、バイカオウレン、タケシマランなどが多い。

Ⅲ 亜寒帯・亜高山帯代償植生

2. ダケカンバ群落

ダケカンバ群落は奥多摩の海拔 1650 ~ 2000 m のブナクラス上部からトウヒ-コケモモクラス域に生育する落葉広葉樹二次林である。この群落はシラビソ-オオシラビソ群集やコメツガ-ウラジロモミ群落などの自然植生が人為的（伐採）或いは自然的な要因（台風など）によって破壊されたあとに成立する。

群落高はふつう 6 ~ 12 m 程度である。林冠は主にダケカンバが優占するが、ミネカエデやオガラバナがこれに代わることもある。低木層にはネコシデ、ミネカエデ、ノリウツギなどの落葉広葉樹とともにコメツガ、シラビソなど、この地域の極相林の主要構成種も多くみられる。林床はミヤマクマザサやスズタケなどが優占するものとササを欠き貧弱な草本層を持つものに大別される。

この群落は、奥多摩の雲取山を中心とする地域に散在しているが、図示されたものはごくわずかである。

Ⅳ ブナクラス域自然植生

3. ブナ-ヤマボウシ群集

奥多摩の日原川源流部流域を中心とする海拔 1000 m から 1700 m にかけての山腹斜面やゆるやかな尾根にみられるブナ林である。

高さ 20 m にも達する林冠にはブナ、イヌブナが優占するほかミズナラ、ヨグソミネバリなどもみられる。亜高木層にはリョウブ、アオダモ、ハウチワカエデなどが、低木層にはミヤマガマズミ、オオカメノキ、コハウチワカエデなどがよくみられる。林床にはスズ

タケが密生することが多いため、草本層は極めて貧弱である。

ブナーヤマボウシ群集は、東京都では前述のように日原川源流部地域の原生林地帯にかなりまとまった面積を持って残存している。このうち、海拔 1450 m 付近より上部では、林冠にウラジロモミを混生することが多い。

4. ブナーオオモミジガサ群集

奥多摩の三頭山一帯に広く分布するブナ林で、タイミンガサモドキ、イトスゲ、エイザンスミレ、レンゲショウマ、ナガバノスミレサイシン、トリガタハンショウヅル、コウモリソウなどの草本類を主とする種群によってブナーヤマボウシ群集と識別される。

高木層から低木層までの構成種はブナーヤマボウシ群集と大差ないが、林床にスズタケを欠き前述の種群に代表される発達した草本層を有していることが大きな特徴である。

東京都におけるこの群集の生育地は多くの場合、ロームによって覆われた適潤からやや湿性の立地である。前述の三頭山のほか、鷹の巣山や天目山付近にも断片的に分布している。

5. ツガーコカンスゲ群集

ツガーコカンスゲ群集は奥多摩の海拔 500 m から 1500 m までの尾根筋や沢沿いの急斜面などの岩角地を主な生育地とする群集で、ツガ、アセビ、チチブドウダン、ミツバツツジ、バйкаツツジ、コカンスゲなどを標徴種、識別種とする。相観的にはツガ林、ツガーヒノキ林などの林冠型を示す。高木層にはツガやヒノキが優占するほか、イヌブナ、ミズナラ、モミなどを混生する。亜高木層にはリョウブ、ヤマウルシ、マルバアオダモ、コシアブラなどが多い。低木層にはチチブドウダン、ミツバツツジ、バйкаツツジ、アセビ、トウゴクミツバツツジ、ヤマツツジなどツツジ科の低木が非常に優勢なほか、コアジサイ、クロモジ、ナンキンナナカマドなどもよくみられる。草本層は一般に貧弱で、イワウチワ、コカンスゲ、ヒメノガリヤス、イワハリガネワラビなどを散生するのみという植分が多い。

この群集は、奥多摩日原川源流部の自然林地帯を中心に、大岳山、高岩山、川乗山周辺などの前述立地に分布している。

6. ウラジロモミーコメツガ群落

ウラジロモミーコメツガ群落は、奥多摩のブナクラス域上部に生育する常緑針葉樹林または針広混交林である。組成的にはシラビソオオシラビソ群集とブナーヤマボウシ群集の中間的な性格を持っている。

林冠（高さ 16～20 m）はコメツガ、ウラジロモミ、ジゾウカンバが単独または混交して優占するほか、イラモミ、ダケカンバ、ブナ、シナノキ、ミズナラなども混生する。亜高木層にはコメツガ、リョウブ、ヤマグルマ、ミヤマアオダモなどがみられる。低木層

にはオオカメノキ、サラサドウダン、トウゴクミツバツツジ、ミネカエデなどが多く、スズタケの優占する第2低木層を伴うことも多い。草本層にはシノブカグマ、マイヅルソウ、シシガシラ、シラネウラボシなどがよくみられる。

この群落は、奥多摩の雲取山周辺の海拔 1700m から 1800m にかけての山腹斜面にシラビソ-オオシラビソ群集と接して帯状に分布するほか、海拔 1450 m 以上の尾根筋や岩角地などの土壌の浅い立地にも分布している。

7. シोज-ミヤマクマワラビ群集

奥多摩の海拔約 900 m 以上の溪谷に発達するシोज、サワグルミを主体とした高木林で、シोज、サワグルミ、ミヤマクマワラビ、イワボタン、テバコモジガサ、カメバヒキオコシなどを標徴種、識別種とする。

典型的な植分では群落高が 30 m にも達し、胸高直径 60 ~ 80 cm に及ぶシोज、サワグルミ、カツラ、オヒョウなどが林冠を構成する。亜高木層から低木層にかけてはチドリノキが優占することが多い。草本層は多様性に富み、1 調査区で 30 ~ 50 種の植物が出現する。ここにはミヤマクマワラビ、ジュウモンジシダ、ツヤナシイノデ、ミヤマシケシダ、キョウタキシダなどのシダ植物やカメバヒキオコシ、ウワバミソウ、テバコモジガサ、ムカゴイラクサなどの好湿地性の草本植物が高常在度、高被度でみられる。

この群集は沢筋の崖錐状の地形のみられる所や谷頭の急斜面など、大小の礫が堆積した立地上に成立している。東京都では奥多摩日原川源流部の大雲取谷、唐松谷、孫惣谷、小川谷、ミノト谷などの沢筋や源頭部に発達した残存林分がまとまってみられる。このほか三頭山の沢筋にも比較的まとまったものをみることができる。

8. フサザクラ-タマアジサイ群集

フサザクラ-タマアジサイ群集は、ヤブツバキクラス域上部からブナクラス域にかけての沢筋で、土砂や礫の移動の激しい不安定な湿性立地に成立する亜高木林または低木林である。

この群集には、自然の土砂崩れなどによって形成された砂礫の堆積地に成立した自然植生的なものと、沢筋の自然林の伐採跡に成立した二次林的なものの両方が含まれているが、いずれもフサザクラ、タマアジサイ、ウリノキ、ヤブデマリ、キブシなどの種群を持つことにより特徴づけられる。群落高は 10 m 内外のものが多い。林冠にはフサザクラ、オオバアサガラ、アサダ、オニグルミ、トチノキなどが優占するほか、ミツデカエデ、オニイタヤ、ミズキなどもよくみられる。低木層にはアブラチャン、チドリノキ、キブシ、ヤブデマリ、タマアジサイ、ガクウツギなどが多く、草本層では、ムカゴイラクサ、ウワバミソウ、ジュウモンジシダ、キョウタキシダ、ミヤマシケシダ、ヤマアジサイなどが高常在度で出現する。

フサザクラータマアジサイ群集は、奥多摩の海拔 300 m から 1200 m ぐらいまでの沢筋に広く分布し、特に植林地や二次林の優勢な地域で大きな広がりを見せている。

V ブナクラス域代償植生

9. ミズナラークリ群集

この群集は、奥多摩のブナクラス域に広く分布する落葉広葉二次林で、ミズナラ、ツノハシバミ、オオバギボウシ、アケボノスミレなどを標徴種、識別種とする。

林冠の主要構成種はミズナラ、コナラ、クリなどで、このほかウリハダカエデ、クマシデなどもよくみられる。亜高木層にはリョウブ、ヤマボウシ、コハウチワカエデ、ヤマウルシなどが目立つ。低木層にはツノハシバミ、コゴメウツギ、コアジサイ、クロモジ、タンナサワフタギなどが高常在度で出現する。草本層には陽生草本植物や木本植物の幼木が多い。

東京都におけるミズナラークリ群集の分布域は海拔 700 m から 1600 m までの広い高度幅を持っており、特に御前山、倉戸山、笹ノ岩山、笹尾根などに大きな広がりがみられる。

10. スズタケ群落

スズタケ群落は奥多摩の長沢谷の山腹斜面や石尾根の防火線などに分布するササ型草原である。高さ 2 m を越すスズタケが密生していて、群落内は非常に暗く、さらにスズタケのリターが厚く堆積しているため草本層はほとんど発達していない。

この群落は、林床にスズタケの優占するブナ林が伐採されたあと、木本植物の侵入定着が十分でない所に発達する。

11. ススキヤマトラノオ群落

ススキヤマトラノオ群落は、奥多摩の山地帯にみられるススキ草原で、ヤマトラノオ、ホソバキリンソウ、ヤマニガナ、ヤブマメなどを識別種とする。この群落はふつう高さ 1 m 前後の草本第 1 層と 0.4 m ぐらいの草本第 2 層からなる。草本第 1 層の主要構成種はススキ、タムラソウ、シシウド、ヤマトラノオ、セイタカトウヒレン、ヨツバヒヨドリなどである。草本第 2 層にはオオバギボウシ、ヒカゲスゲ、ノハラアザミ、アカショウマ、ニガナ、ホソバキリンソウ、オトギリソウなどが多くみられる。

この群落は定期的に刈り取りが行なわれる防火線や採草地に二次的に発達したもので、石尾根の鷹の巣山を中心とする稜線上や山梨県と境を接する笹尾根の西原峠付近などに帯状に分布している。

12. 伐跡群落（タラノキークマイチゴ群落）

森林が伐採された跡には、タラノキ、ヌルデ、クサギなどの先駆性木本植物やクマイチゴ、ニガイチゴ、クサイチゴなどの有刺植物、ダンドボロギク、タケニグサ、ナギナタコウジュ、コシオガマなどの陽性植物などからなる種々の群落が成立する。タラノキークマイチゴ群落は東京都の山地を中心とする地域の伐採跡地にみられる代表的な群落で、タラノキ、クマイチゴ、クサイチゴ、ニガイチゴなどの種群によって識別される。植生図にはスズタケ群落を除く他の伐跡群落も一括して示してある。

現在伐跡群落でやゝまとまった広がりを示すものは桧原村数馬周辺と奥多摩町の倉沢谷付近にわずかにみられるのみで、他は断片的なものばかりである。

Ⅶ ヤブツバキクラス域自然植生

13. モミーシキミ群集

多摩地方の山地下部（海拔200 mから750 m付近まで）の尾根筋から山腹斜面に生育している高木林で、ミヤマシキミ、シキミ、ウラジログシ、シラキ、ツクバネガシなどを標徴種、識別種とする。林冠の優占種はモミとは限らず、立地によって異なる。例えば、この群集が東京都で最大の分布面積を示す高尾山では、尾根筋のモミ林、南斜面のウラジログシ、アカガシ、ツクバネガシ、アラカシからなるカン類混交林、北斜面のイヌブナ林というように優占種は一定しない。

モミーシキミ群集の東京都での残存林分は前述の高尾山のほか八王子城趾、今熊神社などにまとまりのあるものがみられるが、他はこの群集の成立領域が一大林業地帯となっているため、尾根筋や急斜面などの造林不適地に断片的なものばかりである。

14. ケヤキーイロハモミジ群集

ケヤキーイロハモミジ群集は落葉広葉樹の卓越した高木林で、ケヤキ、イロハモミジ、アブラチャン、コクサギ、オニイタヤ、カンスゲ、コアカソ、ミツデカエデなどを標徴種、識別種とする。群落高は15～25 mで、高木層にはケヤキが優占するほかオニイタヤ、アサダなどを高被度で伴うことも多い。亜高木層にはイロハモミジ、チドリノキ、ミツデカエデなどが多くみられる。低木層にはガクウツギ、ヒメウツギ、コクサギ、タマアジサイなどが多く、また、草本層にはカンスゲ、キヨタキシダ、ジュウモンジシダなどの湿生の草本植物が高常在度で出現する。

この群集は、東京都では海拔約300 mからブナクラス域との境界領域付近までの沢筋の急斜面や角礫の堆積する崖錐部などに生育しているが、残存するものは断片的なものが大半である。